

ニシマカジキ 大西洋

White marlin *Kajikia albiga*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

- 最大体長・体重：下顎叉長 205 cm ・ 67 kg
- 寿命：20 歳
- 50%成熟体長：下顎叉長 雌 145 cm ・ 雄 140 cm
- 産卵期・産卵場：春、熱帯域
- 索餌期・索餌場：夏、温帯域
- 食性：おそらく魚類、イカ類
- 捕食者：大型歯鯨類、マグロ・カジキ類等が小型個体を捕食すると考えられる。

利用・用途

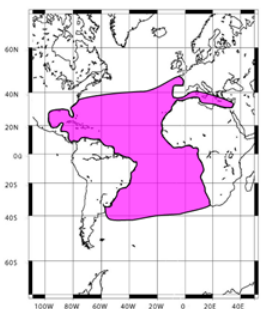
刺身、寿司、切り身（ステーキ）、マリネ等

漁業の特徴

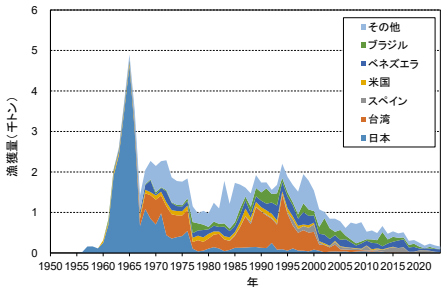
本資源を主対象として漁獲している漁業は米国、ベネズエラ、パナマ、ブラジル等のスポーツフィッシングとカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国の沿岸零細漁業であるが、漁獲量の大部分は台湾、日本、ブラジル等のはえ縄漁業の混獲によるものである。近年、ベネズエラ、トリニダード・トバゴ等のカリブ海諸国やブラジルの零細漁業の漁獲の割合が多い。近年、本資源の外見に極めてよく似たラウンドスケールスピアフィッシュ (Roundscale spearfish *Tetrapturus georgii*) という別種の存在が確認され、ニシマカジキの報告漁獲量にこの別種の漁獲が含まれていることがわかった。現在までのところ、ICCAT のニシマカジキの漁獲統計はこの2種を一括に計上している。

漁獲の動向

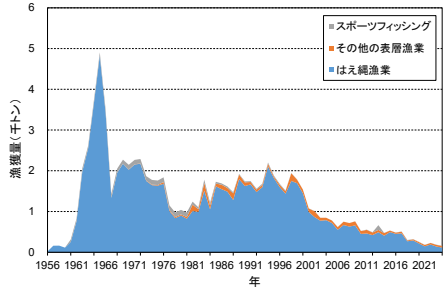
本資源の漁獲の大半は、はえ縄漁業によるものであり、1980年代半ば以降は南大西洋での漁獲が、北大西洋を上回っていたが、2010年からは北大西洋の漁獲量がやや多くなっている。本種の総漁獲量は1960年代に約5,000トンまで達した後、1970年代に2,000トン前後に急減し、2000年までの間に900~2,300トンの間で推移した。その後総漁獲量は緩やかな減少傾向を示し、2009年までは700トン前後で推移したが、2010年以降再び減少し、2024年は暫定値で158トンと報告されている。日本の漁獲量は、1990年代前半まではほぼ全ての年で100トンを上回っていたが、それ以降減少を続け、近年の漁獲量は3~10トンであり、2024年は5トンであった。



ニシマカジキの分布



ニシマカジキの国・地域別漁獲量 (1956~2024年)



ニシマカジキの漁法別漁獲量 (1956~2024年)

資源状態

2025年の資源評価はベイジアンプロダクションモデル（JABBA）と統合モデル（SS3）を用いて実施された。しかし、SS3はレトロスペクティブ解析において正のバイアスが認められ、モデル診断に深刻な問題があったため、評価結果として用いられなかった。本資源は過去に高い漁獲圧を受けてきたものの、現在は漁獲圧が低下し、漁獲死亡係数は最大持続生産量（MSY）レベルを下回っている（ $F_{2023}/F_{MSY}=0.19$ ；95%信頼区間：0.09～0.35）。一方、資源量はいまだにMSYレベルよりも低い状態（ $B_{2023}/B_{MSY}=0.8$ ；95%信頼区間：0.39～1.61）と考えられる。以上より本資源は、資源量は乱獲状態にあるものの、漁獲圧は過剰漁獲状態ではない。将来予測については、プロセスエラーが継続的に強い負の傾向を示していることや、CPUEトレンドの不確実性が大きいことを理由に、実施されなかった。

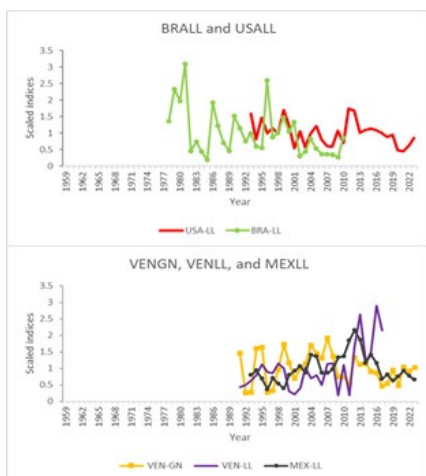
管理方策

2019年に行われた資源評価結果を受けて、ニシマカジキ資源に対しては、2020年以降の毎年の陸揚げ限量量を355トンとすることが合意された。日本の割当量は年間35トンである。また、生きて漁獲された個体は、できるだけ放流後の生存率が高くなるように放流することが勧告されたほか、資源解析・評価の実施に当たって問題となった生存放流及び死亡投棄個体数の推定方法の検証、スポーツフィッシングに対してはオブザーバーの乗船（カバー率5%）及びサイズ規制と釣獲物売買の禁止が勧告されている。

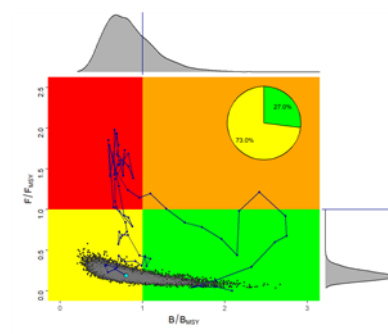
ニシマカジキ（大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量* (最近5年間)	158~254トン 最近(2024)年：158トン 平均：202トン(2020~2024年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	3~10トン 最近(2024)年：5トン 平均：7トン(2020~2024年)
資源評価の方法	ベイジアンプロダクションモデル（JABBA）の結果
資源の状態 (資源評価結果)	$B_{2023}/B_{MSY} = 0.80$ (95%信頼区間：0.39~1.61) $F_{2023}/F_{MSY} = 0.19$ (95%信頼区間：0.09~0.35) 2023年の資源状態は、過剰漁獲ではないが乱獲状態である。
管理目標	MSY (1,497トン※95%信頼区間：1,160~1,937トン) 水準の資源量 (B_{MSY})
管理措置	2020年以降の陸揚げ限量量を355トンとする(日本の割当量は35トン)。 スポーツフィッシングについてオブザーバー乗船(5%)、サイズ規制、釣獲物の売買禁止。
管理機関・関係機関	ICCAT
最新の資源評価年	2025年
次回の資源評価年	未定

* 漁獲量には、いずれもラウンドスケールスピアフィッシュの漁獲が混入していると考えられる。



資源評価で用いられた漁業別資源量指数ベネズエラの指数 (VENGN, VENLL) 及び台湾はえ縄後期 (CTP-LL2) は、資源評価のベースケースに使用されていない。



資源評価結果（神戸プロット）JABBA モデルの結果。薄い青点が2023年の資源状態、青い線が1953年以降の資源状態の不確実性を表し、黄色ゾーンに入る確率が73%、緑色のゾーンに入る確率が27%であることを示し、灰色の確率分布は、それらの B/B_{MSY} と F/F_{MSY} に対する頻度分布を表す。